The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ウィトゲンシュタインの二つの二重否定
Author(s)	奥, 雅博
Citation	カンティアーナ. 1991, 22, p. 55-70
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66700
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ウィトゲンシュタインの二つの二重否定

奥　雅　博

『数学の基礎』の新版（第三版）には、「二つの二重否定」に関する考察が第I部付録Iとして新たに収録されている。収録された原稿は、第I部の原稿と同じ TS221 に属し、その末尾をなしているものである。初版においては、この部分は「より改良されたヴァージョンが『哲学探究』五四七―五六八節に見いだされる」（編者まえがき）という理由で削除されていた。これが第三版では収録され、ただし第I部の末尾ではなく、付録Iとして位置づけられたのである。

この位置づけには理由がある。第一に、内容が独立した一まとまりをなしている。その上に、原稿の書かれた時期の問題がある。タイプ原稿のもとになった手書き原稿は MS115 の五九―七一ページに見いだされるが、これは一九三三年から一九三四年の間に、しかもおそらく一九三四年に書かれたものである。[1]『数学の基礎』に収録されている他の原稿の全てが一九三七年以後のものであることを考えれば、我々は例外的に早い時期の考察を第I部付録Iとして目にしているわけである。

それ故、付録Iは「二つの二重否定」の問題を考察するために有用な、もう一つのヴァージョンに留まる訳では

ない。ウィトゲンシュタインの中期から後期思想への展開を考える上でも、一つの有力な手がかりとなっているのである。

いずれにせよ、問題の提示から始めることにする。

次のような状況が想定されている。

ある言語に二つの否定詞が存在する。両者の相違は単純否定では現れてこないが、それらが二重否定で使用されると一方は肯定となり、他方は強い否定となる。前者を‘non’、後者を‘ne’と表記し、[2] 両者の関係を示すならば

non.non p≡p (A)

ne.ne p=ne p (B)

non p=ne p (C)

である。両者の用法は細部にいたるまで一致しているわけではない。

しかも、これらの否定詞の使用にあたっては、やや注意を要する。ウィトゲンシュタインから離れるが、このことを形式的に例示してみる。ここで p に任意の命題の代入を許し、(A)－(C)の等式に基づいた任意の置換を許すならば、我々はたちまち矛盾にいたるのである。即ち

(C)の p に対して non p を代入して

non.non p=ne.non p (1)

を得、次に(1)の右辺に現れる non p に対して(C)の等式により置換を行い

non.non p＝ne.ne p　　(2)

を得る。ここで(2)の左辺に等式(A)、右辺に等式(B)を適用すると

p＝ne p　　(3)

即ち、矛盾的命題が得られるのである。

ここで、non と ne について次のような問が生じてくる。

（1）non と ne は同義語とみなすべきか、それとも異義語とみなすべきか。

（2）ふたつの否定詞 non と ne のうち、いずれが「より正統的」か。

（3）両者が文中で繰り返しなしで、即ち単純否定として使用されている場合、両者は同じ意味をもつか。

『基礎』と『探究』における「二つの二重否定」に関するウィトゲンシュタインの考察は、これらの三つの問の形にとりあえず集約されると、私は考える。

これらの問に対するウィトゲンシュタインの解答は、否定的であるか、もしくは設問の形式自体がミスリーディングである、とするものであった、と私は考える。即ち、（2）については、non と ne のうちのいずれかを正統的とみなす理由はない、（1）については、同義語であるか異義語であるか、という二者択一が不適切である、（3）については、細部まで完全には用法が一致しない二つの語が同じように使用できる場面がある、という事実の確認をこえて、更に「この場合同義か否か」と問い続けようとすることこそ哲学の誤謬である、とするのが彼の立場である、――これが私の解釈である。(3)

以下順次このことを示し、最後に「二つの二重否定」に関する考察の射程について考えてみたい。

（1）non と ne は同義語かそれとも異義語か。

同義語か異義語かの二者択一を迫ることがミスリーディングである、と考える立場からすれば、同義語とみなす論拠を積極的に提示する必要はない。二つの語を異義とみなすための一般的論拠を枚挙し、それらを一つ一つ批判的に吟味し、更に吟味に耐えたものについて、non と ne のケースにあてはまるか否かを検討すれば十分である。(4)

以下、ⓐ—ⓔにわけて、論じてみる。ⓐは一般的な議論、ⓑとⓒはマイナーな論点、ⓓとⓔはウィトゲンシュタインの自己批判ともなっている本質的な議論である。

ⓐ　二つの語の用法が完全に一致する場合のみ、それらは同義であり、それ以外の場合、それらの用法は異なるが故に異義である、non と ne の用法は完全に一致しないが故に異義である、という主張。（『基礎』第Ⅰ部付録Ⅰ一四—一五節を参照。）

この主張は *salva veritate* の原則を「意味の用法理論」に適用した形になっている。しかし、この単純明快な主張は、厳格に維持されると、空虚な主張となるのである。

例えば、韻文では、一つの表現をそれと同義な他の表現で置換できない、というのが常態である。従って、ⓐの立場では、「異音同義語」は一般に存在せず「同音同義語」のみが存在する、いいかえれば、言語表現は自分自身とのみ同義である、ということになり、問題そのものを消去してしまうことになる。

別な言い方をすれば、二つの表現の同義性に我々が頭を悩ます場合、我々はそれらがどのような意味で同じであ

るか、またどのような意味で異なっているかを比較考量しているのである。従って、ⓐの抽象的原則で問題を切り捨てることはできない。(5)

ⓑ　長さの二つの単位の例。(『基礎』第I部付録I一二―一三節、『断片』一四一―一四二節を参照。)

通常の長さの尺度(フィート)に対して、もう一つの尺度(W)が、1ft=1W, 2ft=4W, 3ft=9W,……という形で与えられたとする。ここで、1ft=1W からft=W を導出するのは誤りである。……

ここまでの議論には問題がない。しかしこれに続けて、「non p=ne p からnon=ne を導出するのも同じ誤りである、即ち、non と ne は異義である」と論じられるとすれば、これは問題である。non と ne の関係は、二つの尺度の数字の読みが一ケ所で一致した程度の外面的関係ではない。両者ともに否定をいわば体現しているのであり、以下の(2)で扱う立ち入った考察抜きに片づけられる問題ではない。

ⓒ　「同音異義語 'ist'」の例。(『基礎』第I部付録I一七節、『探究』五五八、五六一節を参照。)

'ist' はコプラと同一性という二つの異なった意味で使用される。ところで二つの異なった意味が一つの語に体現されていることは非本質的な偶然である。もし、同一性とコプラにそれぞれ異なった語を割り当てれば、君合国 'ist' は解体するであろう。……

'ist' が同音異義語であるか否かについては、議論を要する。しかしこの論点をとりあえず承認したとしても、主張ⓒが 'non' と 'ne' のケースに適用されることにはならない。'ist' が用いられる各々の場合について、それがコプラであるか同一性記号であるかを区別できるとしても、'non' と 'ne' については、それらが単純否定として用いられる場合には、両者のいずれを用いても一向に差し支えがないのであって、何故 'non' を用い 'ne' を

用いないか（あるいはその逆なのか）と問うのは無意味である。つまり、‘non’と‘ne’の用法は‘ist’の二つの用法よりも密接なのである。

ⓓ　語の意味の体系依存性の主張。（『基礎』第Ⅰ部付録Ⅰ一〇節、『探究』五五二、五五三節を参照。）

中期ウィトゲンシュタインの数学論を彷彿とさせる主張である。即ち、自然数の体系と実数の体系とは別な体系である。それ故「一メートル毎に一人の兵士が立っている、従って二メートル毎に二人の兵士が立っている」という文に二度ずつ登場する「一」と「二」はいずれも意味が異っている、というのも、はじめの数字は測定量（Maßzahl）を、後の数字は人数（Anzahl）を現しているのだから。……従って自然数の「1」にせよ実数の「1」にせよ「1」はいずれかの係系に属して初めて「1」である。我々が、「1」を使用する折にはいずれの「1」にコミットしているかが明らかでなければならない。また、‘non’と‘ne’について言えば、この言語で単純否定を使用する場合、‘non’と‘ne’のいずれかに必ずコミットしていなければならないのである。……

しかしながら、ウィトゲンシュタインはこの主張に、もはや賛成しない。即ち、ⓓの主張は哲学的な誘導尋問なのである。確かに、我々は、数学の体系として、自然数の体系と実数の体系が区別できること、更に、数学の応用に際して種々の制限が課されることを承知している。例えば、「一・七メートル毎に一・七人の兵士が立っている」という表現はナンセンスである。

しかし、このことから「一メートル毎に一人の兵士が立っている」という文に登場する二つの「一」が異なった意味を持つ、という結論を導く必要はない。数を実際に使用する全ての場面で、我々は数の体系のいずれかにコミットしている訳ではない。さもなければ、5で終わりとなる原始的な数の体系と我々の数の体系とは異なっている、

従って、幼児と大人の話に数「2」が登場するとき、二人は別な話をしているか、それとも大人は幼児の発達に応じてめまぐるしく変化する数の体系にその都度話を合わせてコミットしている、というおかしな結論が帰結するであろう。(『基礎』第I部付録I九節、『探究』五五五節)

必要に応じて区別ができ、制約や条件を課すことができる、ということと、常にその都度あらかじめ異なる体系のいずれかにコミットしている、ということとは同じではないのである。

ⓔ　規則の総和が意味を与える、という説。(『基礎』第I部付録I一八—二〇、二三、二四節、『探究』五六二—五六四、五六七節を参照。)

これも中期のウィトゲンシュタインの典型的な発想である。即ち、ゲームの駒の意味は何らかの「実在」に訴えて決定される訳ではない。規則の総和が意味そのものである。従って、'non' と 'ne' の両者について規則全体が一致しないので、二つの語の意味は異なっている。……

ウィトゲンシュタインはこの主張にもはや賛成しない。ゲームの規則の中で、本質的な規則と非本質的な規則を区別すべきなのである。彼は三つの例を挙げている。㋐チェッカーでは石を二つ重ねることによって王が他の石と区別されているが、このようにして王を表示することはチェッカーにとって本質的か。㋑チェスのゲームに先立って、一人がキングを二つの握り拳のどちらかに握ってみせ、もう一人がどちらの手にキングがあるかを当てる、このことによって先手を決める、という規則が制定されたとする。この場合、先手の決定のために使用されるということは、キングにとって本質的か。㋒チェスの指し手の度毎に、競技者は動かす駒を予め三回転させねばならない、という規則があったとする。この作法が、落ちついて指し手を選ぶことに寄与するとしても、三回転の作法はチェ

スにとって本質的か。

三つの規則のいずれも非本質的である、というのがウィトゲンシュタインの採る方向であった。規則の総和が意味を与える、という主張はまちがいではないが、過度に強調されると一面的になる。ゲームも規則も眼目（Witz, point）を必要とするのである。

‘non’と‘ne’の規則も細部では一致しない。しかし、この不一致の射程については、否定の眼目の下で考量する必要があるのである。

以上ⓐ—ⓔにわけて、non と ne が同義語か否か、という問を吟味してきた。両者の用法が細部では一致していないこと、これはウィトゲンシュタインも当然承知している前提である。しかしこのことから直ちに、両者は異義語である、という結論が導かれるのではないのである。

（2）non と ne のうち、いずれが「より正統的」であるか。

ウィトゲンシュタインが「二つの二重否定」という問題に思い至ったのは、『基礎』第I部付録Iの基になる手書き原稿が書かれた時期よりそれ程早くない、と思われる。一九三一年の冬の学期の講義[6]では、二重否定は肯定であることが素朴に前提されている。他方、一九三四年の秋学期の講義[7]では、‘the family of negations’——即ち、複数の否定が作り上げる家族的類似性、について述べられている。

‘non’と‘ne’のうちのいずれかが「より正統的な」否定詞である、ということはない、というのが、ウィトゲンシュタインの結論であるが、彼の思考の経緯からみて、議論は概ね「二重否定は肯定」という独断を反駁する、

という形で行われている。即ち、「否定の意味から二重否定は肯定であることが帰結する」、「否定の本性から否定記号の規則が帰結する」、「否定というものがまず存在し、次いで文法の規則がある」(『基礎』第Ⅰ部付録Ⅰ七節、『探究』p. 147n.、『哲学的文法』第Ⅰ部第Ⅱ章一五節を参照)、「否定を適切に把握すれば」(『基礎』第Ⅰ部付録Ⅰ一、四節を参照)「否定の意味からすれば」(『基礎』第Ⅰ部付録Ⅰ一一節)「二重否定は肯定である」という主張への反論である。

ⓐ　否定詞の使用から独立な「否定の本性」に訴えて、正統的否定詞を決定することは不可能である。

ⓐの一　精神的行為としての否定(『探究』五四七、五四八節を参照)。

「出来事Aが生じるように望むこと」と「出来事Aが生じないように望むこと」との差として否定を特定する、という課題が示唆されている。この課題が実行可能であれば、否定行為を二度繰り返してみて、それが肯定であるか、強い否定であるかを実験的に調べれば良い。しかしこの計画全体が心的動詞(mental verb)の誤解から生じた実行不可能なものである。

ⓐの二　その他の言語外的モデルでは non と ne に優劣がない(『基礎』第Ⅰ部付録Ⅰ一節、『探究』五五六節を参照)。

一八〇度の回転(上下逆さまにする、裏返す)を二度行うと元に戻るという肯定のモデルにたいしては、首を横に二度振ると強い否定になる、というモデルが対置される。また、否定を「半周する」というモデルで解釈しても、二重否定が「一周する」になるか「二度半周する」になるか決定できない。

ⓑ　「否定詞を適切に把握する」「否定の意味から」云々、というのは独断である。これは「自説に合わせて否

定詞を使用すれば」ということに他ならない。

ⓒ 二重否定が否定として用いられることは話し言葉ではよくあることである。[8]

ⓓ 二重否定形を持たない言語すら想像可能である（『基礎』第Ⅰ部付録Ⅰ八節、『探究』五五四節を参照）。

否定が否定詞によってではなく抑揚によって表現される場合、文法が二重否定を禁止している場合などがそれである。この種の言語で育った人々には、二重否定はそもそも不可能と思われるか、ナンセンスと思われるか、単なる繰り返しと思われるかであろう。

二重否定形を持たない言語は、二重否定を許す言語に比較すると、修辞能力の点では劣っているかもしれないが、言語としての要件を欠いているわけではない。他方、二重ないし多重否定に対して「そのような持ってまわった言い方を何故するのか、肯定か否定かをはっきりさせろ」とよく言われることも事実である。

二重否定形を持たない言語が可能であるとすれば、'non' と 'ne' の用法の差はごく小さなものと見えてくる。まして、両者のいずれが正統的否定詞か、という問は、それ自体がナンセンスなのである。

（3）non と ne が単純否定として用いられる場合、両者は同じ意味か。

この問自身がミスリーディングである。両者の用法は細部では一致しない。しかし単純否定として用いられるとき、両者は同じように用いられる。しかもこの場合、'non' を用いるか 'ne' を用いるかに応じて何らかの異なったコミットメントをしている必要は全くない。これが解答の全てである。

この解答に不満が残るであろうか。残るとすれば、それは不満を持つ側の責任である。ウィトゲンシュタインは

次のように述べている。

（我々はここで哲学的探究における奇妙で特有な現象にいきあたる。即ち、――私はこう言いたいのだが――困難は解答を見いだすことではなく、あることを解答として承認することにある。我々は既に全てを語っているのだ。――そこから引き出されることではなく、まさにそのことこそ解答なのだ！

私の思うに、このことは、我々が説明を誤って期待することと関係がある。記述が難問の解決であるというのに。もし我々が記述を我々の考察の中に正しく配列すれば、もし我々が記述の下にとどまり記述を超えて進もうとしなければ。）（『基礎』第Ⅰ部付録Ⅰ二節）

哲学の解答、記述と説明、といった後期のウィトゲンシュタインを特徴づける姿勢、――これが一九三四年に既に明瞭に語られているのである。

総括。

これまでの議論は、'non' と 'ne' という二つの否定詞を仮定したある仮想言語について進められてきた。スコラ的とも思えるこの抽象的な議論は、どれほどの射程を持つのであろうか。

私見によれば、第一に、ここで得られた結論は言語の論理的ないし構文論的諸概念のある種の分析にそのままの形で適用可能である。第二に、「二つの二重否定」という単純で明確で見通しの効く構造であるにも拘らず、（1）

―（3）の問に対してことごとく「消極的ないし否定的な」結論が得られたことは、より「ファジー」な多くの日常的概念同士の関係についても、同様な結論が得られることを含意している。以下、これらについて例示して結びとしたい。

ラテン語には選言詞として排反的な‘aut’と非排反的な‘vel’という二語が存在するが、日本語の「または」にはその区別がない。‘aut’と‘vel’が同義か否か、‘aut’‘vel’「または」の中のいずれが最も正統的な選言か、といった問が愚問であることは‘ne’と‘non’に関する上述の考察と同様に示すことができる。

さて、日本語の「または」に排反、非排反の区別がないからといって、「または」が時には排反的に、時には非排反的に用いられることを我々が知らないわけではない。「今度生まれる赤ん坊は男の子か女の子か」は排反的に、「十五才以上の者、または、保護者に同伴された者のみが入館を許される」は非排反的に解するのが自然である。即ち、語彙、文脈、社会通念などから「または」の読みが定まる場合がある。あるいは、必要に応じて、排反的、非排反的のいずれで用いているのかを明示すべき場合がある。しかしこのことは、我々が「または」を使用するときはいつも、それを排反的に使用するか非排反的に使用するかのいずれかにコミットしているということではない。心の中では‘aut’か‘vel’のいずれかを用いているが、日本語にはこの区別がないので、余儀なく「または」を使用している、という事情ではない。上述の二つの例で、「または」は同じように使用されているのである。さらに、「明日の天気は晴または曇でしょう」と言われる時、これが排反的に用いられているか非排反的に用いられているか、と問われるなら、「そんな問題など全く考えたこともない」というのが自然な答なのである。

繰り返しになるが、選言について排反的、非排反的という区別があることを知っており、また、必要に応じて区

別できるということは、言語使用の全ての場面で区別していることと同じではないのである。

もう一つの例は日本語の名詞の文法である。日本語の名詞には単数複数の区別が存在しないし冠詞も存在しない。しかしこれは日本語が表現力に乏しい言語である、ということではない。必要があれば、数詞や種々の指示詞を用いて区別できる。だが、必要に応じて区別可能、ということは常に暗黙裡に区別している、ということではない。「日本語で『人は死ぬ』と言うとき、ドイツ語の

Der Mensch ist sterblich.

Alle Menschen sind sterblich.

Jeder Mensch ist sterblich.

のいずれを意味していたのか」と問われるならば、「いずれでもない、『人は死ぬ』は『人は死ぬ』だ」と言うのが最も自然な答であろう。

今の二つの例は、論理語と、文法の中核的概念から採ってきたものである。より「ファジィー」な日常的概念に関しては、「色の文法」を例に採ることにしたい。曖昧模糊、四通八達、混沌の極致といった概念については、議論が困難であり、また不要だからである。これに対して、「色の文法」は色立体に表示されるように、それだけをとり出して扱いやすい比較的孤立した一つのグループをなしており、その構造、相互関係も比較的みてとりやすいからである。ちなみに、色の文法はウィトゲンシュタインが永年に亘って関心を示し続けた主題である。

二つの自然言語、例えば日本語と英語で色の語彙が一対一に対応する訳ではないことは、周知の事実である。「青」と‘blue’は同義語か否か、という問に対してどのように答えていくべきか、あるいは、どのように答える

べきではないかは、もはや明かであろう。また、日本語の一人の話し手にあっても「青」が一様に用いられている訳ではない。例えば、[9]「この青とあの青は同じか。違いがわからないか。」「空のこの青は絵の具で合わせにくい。」「晴れてきた。もう青空が見える。」「そこの青い本がわかるね。それをよこしてくれ。」「この青信号の意味は……」といった「青」の用い方に、ニュアンスがあることは確かである。しかし我々は、用法に応じてその都度それぞれの異なった色体系、異なった「青」にコミットしているわけではない。我々は一つの同じ「青」という語を用いている。いわば、伸縮自在に用いている。しかも、先ず大抵はその伸縮自在さを意識することなく用いているのである。

注

(1) ここでMS115の構成について述べておくことにする。MS115の一一八ページより二九二ページに至る後半部は、一九三六年に執筆され中途で挫折した『茶色本』のドイツ語版を作成する試みである。なお『茶色本』のドイツ語訳（ズールカンプ社）ではMS115がカバーする限り、ウィトゲンシュタイン自身の原稿が使用されている。

前半部は一ページにのみ一九三三年一二月一四日という日付があるが、それ以後一九三四年にかけて記されたものと推定されている。そのうち三七ページの冒頭までは『哲学的文法』執筆中の手書きの修正原稿であり、MS114からの続きとなっている。MS115に含まれる部分は第I部一一五―一四一節の修正の指示として現在公刊されている同書に活用されている。

本論文でとりあげている箇所（五九―七一ページ）は、従って現在未公刊の三七―一一七ページの一部をなしている。ところで、三七ページにおける『哲学的文法』の修正原稿とこの未公刊部分との間の切れ目は確かに切れ目ではあるが、しかしウィトゲンシュタインの思索の断絶を意味する訳ではない。未公刊部分の冒頭には『探究』四九三、四九四節に対応する覚え書きが記されているが、他方『探究』四九一、四九二節は『文法』I一四〇節と対応しているからである。

一般的にいって、この未公刊の部分は彼の後期の著作に親しんだ者にとっては、いずれもなじみ深いものである。多くのところで『探究』に収録されている覚え書きそのもの、あるいはそれのもととなったヴァージョンが見いだされる。他の箇所もどこかで既に読んでいたとしても不思議でない箇所ばかりである。

しかも、この覚え書きは『探究』が扱う主題のかなり広い範囲にわたっている。また、『探究』が「思索のアルバム」(同書序文)と言われる以上に断片的である。そのなかで本論文がとりあげる箇所は唯一良くまとまった箇所である。

ところで、それ以外の箇所が断片的であるということは、それらが副次的意味しか持たない、ということではない。例えば『探究』四七六節の問題(恐怖の原因と対象)をウィトゲンシュタインがどのようなコンテクストで考えていたかを示す覚え書きが含まれているからである。

参考までに、『探究』のどの節に対応する覚え書きが見いだされるかを私が気づいた限りで列挙しておく。即ち、三七―五九ページの間では、四九三、四九四、五一〇、七〇、七一、七九、八一、八二、八三、八八、三三四、八七の各節及びブラックウェル版一一ページの脚注である。七二ページ以下では、三五三、三五四、三五五、三五六、一、五、二二、二三、二五、二六、二七、二五七、五八七、四七八、四八一、四八二、四八三、四八四、四八五、六一一、六一二、六一三、六一八、六一九、六二〇、六二一、六一三、四七六の各節である。

(2)『基礎』第I部付録I一節を参照。これらの用法とフランス語の否定詞の用法とはもとより一致していない。『探究』五五六節では、'X', 'Y' と表記されている。

(3)ところで、一見すると私の解釈と抵触しそうな箇所が『探究』五五六節に見いだされる。そこでは三通りの可能な解答が列挙されており、その中の(a)と(b)は、かなりウィトゲンシュタインの立場に近いと考えられ、しかも(a)は現在の議論と抵触するからである。即ち

(a)これら二つの語は異なった使用を持つ。従って異なった意味(Bedeutung)を持つ。しかし、これらの語が繰り返しなしに登場し、その他の点では同じである二つの文は同じ意義(Sinn)を持つ。

しかし、このかなり素朴な議論がウィトゲンシュタイン自身の見解であったとすれば、『基礎』や『探究』における詳細な議論は全く不要であろう。(a)は議論のための叩き台にすぎないのである。

(4)接続詞'sondern'と動詞'sondern'の同音異議、「ベンチ」と「銀行」の二義を持つドイツ語の'Bank'、といった『探

究』第Ⅱ部の時期の例と比較すれば、ここでの考察は、以下に示すように、かなり一般的・抽象的・形式的に進められているのが特徴である。

(5) 'synonymous' は「同義」とも「類義」とも訳せるが、この区別に逃げ込むことは許されない。「『等しい』(gleich) を『同一』(identisch) で置き換えるのは、哲学的言い逃れの典型的なやり口である。」(『探究』二五四節)

(6) cf. D. Lee (ed.), *Wittgenstein's Lectures Cambridge 1930–1932* p. 55. なお、『文法』第Ⅰ部第Ⅱ章でも二重否定は肯定である場合のみが考慮されている。

(7) cf. A. Ambrose (ed.), *Wittgenstein's Lectures Cambridge 1932–1935* p. 101.

(8) ウィトゲンシュタインは二つの例を挙げている。
Er hat nirgends nichts gefunden. (『基礎』第Ⅰ部付録Ⅰ一一節)
He don't know nothing about it. (Amebrose (ed.), *op. cit.* p. 101)

(9) 『探究』三三節による。

付記 本稿は第一八回大阪カント・アーベント例会(一九九一年七月六日、大阪大学待兼山会館)において口頭発表した草稿に加筆したものである。なお、最終稿を準備中に大森荘蔵先生よりいくつかの貴重なご指摘をいただいた。その一部分しか本稿では生かすことができなかったが、記して感謝する次第である。

(大阪大学人間科学部教授)